リボーに於ける創造的想像力の分析（完）

西村嘉彦

四

繻にも述べたごとく、創造的想像力はその分析面において、知的要素、感情的要素、無意識的要素とその有機的制約の項目のもとにその構造が追究せられてゐるが、先づ第一にその知的要素として考察せられるとき注目せられる點は、構想力が二つの基本的作用を前提してゐることである。その一は消極的・豫備的な分離作用であり、その二は積極的・構成的な聯合作用である。分離作用は從來の心理學では抽象作用と同一視されるものであるが實はこれを部分として包括するごとき全體的な作用といはねばならない。けだし抽象作用は各々孤立隔離せられた意識狀態を素材とし對象として働くものであるに對し、分離作用は流動せる意識の動態を對象として働くものなるがゆえである。いふまでもなく意識的事實は原子的な意識的成素に分解し得るものでなく、多樣の統一であり、ベルグクン的な用語によれば純粹持續といい得よう。しかし持續は單なる無差別的流動ではない。持續の中には時と處に應じて核が形成せられ、澱みが作られて來る。原子的理論に卽して言へばそれぞれの意識的事象はあらゆる方向に觸手を伸ばして相互に複雜な聯關性を形成してゐる。しかもこの聯關は決して絕對的固定的なものでなくして樣々にその聯關樣式を變化せしめるものであるが、この變化は意識的無意識的に個體の運動を通じてなされる。分離作用はかかる主體の包括的な活動を基として成立するもので、この作用を介して意識狀態は樣々な分解を蒙り、且つこの分解、分離の條件の上においてのみ新しい聯合形態を構成し得るものなのである。

知覺は第一節に綜合作用であると述べられた。知覺は對象刺戟を核として過・現・未の三方向から限定的に構成せられる創造的綜合作用であつた。しかもこの全體表象は鏡面に映る像のごとく一切の主客的限定を並置的

に共有するのでなく、分離・捨象を介して成立する構成的全體であるといはねばならない。要言すれば知覺は分離作用を介して形成される綜合過程と言ふことが出來る。想像作用はもとよりすぐれて聯合作用の基盤の上に立つものであるが、これ亦知覺とおなじく、分離作用を離れて成立するものではない。經驗が聯合と分離との兩者によつて可能なるごとく、形成もおなじ二つの作用によつてのみ可能となつて來る。「構想性は抽象作用と正比例する」といはれる所以である。しかしリボーは抽象作用は原子的意識事實を對象とするかぎり、分離作用の一部であるといふ。けだし抽象作用はそのもつとも高次のものにおいて普遍概念の形成を目的とするものであり、概念は經驗的のものと先驗的のものとを問はず現實超越性と包括性とを特色とする。前者を狹義の抽象作用といふならば、後者は一般化作用であるといつてよい。しかも個體はかかる抽象化作用を通じて現實から脫去するのでなく、反つて高次の現實態に主體の自由を確保することによつて逆に眞に現實を形成するものであつた。概念は唯名論者の指彈するごとき虛構でなく、象徵として現實形成の積極的任務を背負ふものと言はなければならない。おなじ事態は構想作用についても言はれるのであつて、その不安定な段階が夢や空想、空中樓閣に見られるごとき主觀的架空的なものであるにしても、かかる主觀性にエーテル化される想像性を通じて新しい現實の誕生がなされるのである。

創造的想像とは心像の新しき組み合はせであり、且つこの結合の客觀化であるといへる。一體心像は再生されるにあたつてなんらかの聯合法則に支配せられるものであるか、または單獨に再生されるものであるか、については種々の議論が存しようが、ヴントにしたがつて「聯合がなければ再生はない」としても、再生された心像はハミルトン以來呼ばれてゐる「復原の法則」にしたがふものでないこと改めて言ふまでもなからう。再生されるものは常に部分的であつて全體的でなく、しかもこの局部化は第一義的に個體の實用性に根據を置く主觀的制約と、對象自身のもつ諸屬性に緣由する客觀的制約に制禦されねばならない。假に習慣、强制、鮮明さ、時間の接近等によつて全體想起に近い狀態がなされようとも、かかる場合には新しき結合を發生せしむべき創造性を容れる餘地がない。聯合作用は心理學において重要な研究課題を構成するものであるが、ここで問題となるのは、新しい組み合はせを生ぜしめる聯合の形態はいかな

るものであり、また如何なる影響のもとにそれが生起するかといふことである。

観念聯合は古く英國聯想心理學派によつて唱導され、ヒュームのごときは一つの觀念から次の觀念に移る基礎となる性質に類似、近接、因果の關係を擧げてゐることは周知の事實であらう。このうち因果關係は一が他の動作または運動の原因であるときも、一が他の存在の原因であるときも包含するゆえに最も範圍の廣いものとされてゐる。しかしその後嚴密なる聯合の法則は類似と近接の二法則に限定され、前者は內的、後者は外的聯合と呼ばれ、さらに十九世紀中葉にいたるとこれら二法則をいづれか一方へ還元しようとする運動が試みられてゐる。リボーはかかる試みを余りにも統一性を好む行き過ぎで、實際上の効用に重きを置いてゐないが、創造的想像力の機構研究にあたつて必ずしも關心たきものとはせず、それぞれの法則のもつ特性を認識してゐる。卽ち近接聯合は單純にして同質的その再生物は事物の秩序づけと連結とであり、結局は神經系統の獲得せる習慣に歸せられるに對し、類似聯合はその中に三つの契機を有してゐる。(1)現示の契機で、ある狀態Aが知覺ないし近接聯合において與へられ、それが出發點となる。(2)同化作用、すなはちAなる狀態が以前に經驗したaなる狀態に多かれ少なかれ類似せるものとして認知せられる。(3)意識のなかにAとaとが共在する結果、これら二つの要素Aとaとが以前には決して共在してゐなかつたにも係はらず、爾後は相關的に想起せられて來るやうになつて來る。かく分析すれば第二の契機がその最も重要なる位置を占めるものなること自ら判明しよう。類似聯合の中核をなすものは能動的同化 (activo assimilation) の作用であり、同化は『抽象作用と概括作用との原本的な源泉である類似の意識、動物や幼兒にも認められる認識能力の原始表現』(La logique, p. 6) で、本來聯合作用とたんらの關係もなき精神の自發的作用にほかならない。抽象作用はその低次段階において類的心像 (image générique) を發生せしめるものであり、この心像は印象の類似性把握（主觀的と客觀的の兩方向をもつ）による類似印象の融合態として成立するものである。しからばこの同化作用を中心とする類似聯合は本來的な特種な聯合と稱し得ないものであるが、この種の聯合は實は二重構造を有してをり、上層が同化作用であるに對し、下層にほかならぬ近接聯合であるといはなければならない。たとへば私がある人Aに逢つて、四十年間も顏を見ない

友人を想ひ出したとする。これは四十年前のBの屬性abcde……と、現在のAのもつてゐる屬性abcde……との間にabcといふ共通類似要素を認知する同化作用によつて一種の融合が行はれることに依るのであるが、AがBを想起するにはA（abc）によつては不完全で、さらにその上B（abcde……）といふBの全體表象が想起されねばならない。それは（abcde……）なる要素聯關群と（abcde……）なる要素聯關群との間に近接關係が存在し、これによつてAがBを想起するのでなければならぬ。かくしてリボーは聯合の二基準法則のいづれがより原本的であるかといふ問題に深入りすることなくして既に自己獨自の見解から近接聯合をより根本的なものとし、類似聯合は「聯合作用と分離作用の協同作業を前提する」（Creative Imagination, p. 25）ものであり、まさにその故に類似聯合は創造的想像力の素材として重要な因子を構成するものといつてよい。

しかもこの構想力の知的要素として特殊な役割をになふものは類似聯合のなかでも部分的な、時としては偶然的な類似による聯合、卽ち類比聯合（Association by analogy）と言はれるものである。アナロギアといふことについては難しい種々の解釋がなされようが、ここで意味するものは類似を全體的類似的なものとすれば、これに對して部分的種的なものを指してゐる。しからば創造的想像力にとつて決定的な役割をはたす類比聯合は如何なる性質ないし組織をもつものであらうか。

第一に類比の根底となるものは分量的なもので、『比較さるべき屬性の數量』（ibid., p. 26）に依存する。たとへば次の各記號をそれぞれ比較對象の構成的屬性と假定して兩者が（abcde）と（rstuav）で表現されるとすれば、その共通項はa一個であるため兩者間の類比は極めて微弱といはなければならず、之に反して共通項の數が增加する際にはその類比性は大となつて來る。第二に類比の基底は性質ないし複合的性質の價値に依存する。かくして價値の大なるものは類比性が強大であり、價値が小なるとき類比性も微弱になつて來る。第三に注意さるべきは中間項の省略による轉移といふべき半ば無意識的な作用が、特に勢力なき精神に起る事實であつて、これは圖式的には（abcde）と（ghaif）とがaを共通項とし、（ghaif）と（xyfzq）とがfを共通項とするとき、いつのまにか（abcde）と（xyfzq）との間に類比關係が發生して來る現象で、感情狀態の世界ではこの種の轉移が

決して稀といへないのである。

類比聯合はかかる二つの契機を内合しながら、現實において極めて新奇な、豫見すべからざる心像の組み合はせを行ひ、その結果その聯合様式は一見いかなる規則性をも有せざるごとく見えるが、そのあらゆる形式を通觀するに大體次の二型式に還元されるとする。その一は人間化であり、他は變形もしくは轉形と呼ばれるものである。惟ふに想像作用は原本的に主觀的であり、その限り可能的に即物性を本質とする知覺と相反的な地位に立つもので、したがつて人間化は主觀的なるものの極限として成立すること多くの疑ひを容れない。また變形ないし轉形は一つには漠然とした類似を介して行はれ、二つには支配的な感情的要素を有つ類似性によつていとなまれるもので前者は上述の人間化の方向に、後者は次節で述べる感情的要素の方向において解せられるであらうが、いづれにしてもこの主觀的要素の絶對値に限定せられてゐる。かくしてリボーは幼兒および特に勝れて構想力の開花せる原始神話の世界に着目して來たのである。神話を如何に解するかは現在においても種々の學說に分かれてゐるやうであるが、神話のもつ獨自性に關しては自明の事實となつて來てゐる。しかし前世紀においてそ

の重要性に着目し、特に今日さまざまの難點をふくむにしても一面無視すべからざる眞理を藏するタイラーのアニミズム的な解釋に心理學的な基礎を提供したリボーの卓見もまた時代の背景から考へて大きな敬意を拂ふべきであらう。これを要するに類比的聯合は、その最も不完全なものにいたるまで無數の階層を含みつつ創造的想像力の重要契機をなしつつ、同時にゲーテのいはゆる理性の先驅者を構成してゐると言はなければならない。

五

創造的想像力はその種類の多様性、外觀の神祕性にもかかはらず、心理學的には心像の新しき組み合せでありまたその現實化活動であつた。さうしてこの創造性は先づ、その知的側面において考察せられたとき聯合、特に類比聯合として把握せられたのである。聯合の二大法則は大體類似にもとづくものと近接にもとづくものとの二つに分れる様であるが、前節に述べたごとくリボーは近接聯合をより基本的なものと觀じ、それの地盤の上に立つ類似聯合が分離作用を必然的構成契機とする重層的聯合であることに着目するとともに、分離作用は同時に同化作用と相卽し、しかも能動的な同化作用はうちに創造性を含むことが檢證せられることによつて、いはゆる

類比聯合が創造性をもつとも豐に有つ知的因素として重大な顧慮が拂はれたのであるが、リボーが何よりも怖れたのは聯合が決して世上傳聞せられるごとき精神的アトムとしての觀念の聯合でなく、意識的事實は全體的系列のなかにおける事實であり、分離、聯合いづれにせよそれによつて意識は新しき形態を形成することであつた。復全の法則は知的な觀念聯合においても一般的妥當性を主張し得ないものであるが、いはんや知性の母胎となる感情性においてこの種の法則は全く制限せられた意味しか有し得ないものである。

もちろんここでは感情性の全構造を概觀せんと意圖するものでなく、創造的想像力の構成契機としていかなる意味と役割をもつかを考究せんとするものである。しかる場合知的因子としてまづ類比聯合が、また次節に述べるごとく無意識的因子としてもとにかく或る種の聯合が注目せられたと同じく、ここでも感情を契機とするなんらかの聯合の形態が中心課題となつて來るであらう。知的な觀念聯合は類似聯合と近接聯合とにその根本法則が大體定立されるものとするならば、感情的聯合は果して存在しないものであらうか、またありとすればその構造はいかなるものであらうか。またもし聯合がある知的表象と他の知的表象との結合であるとするならば、かかる知的聯合を可能ならしめる媒介動力が感情性に求められはしまいか、さらに知的表象と感情性の聯合が認められないだらうか。

聯想學派の主張せる聯合はすぐれて知的であつた。しかし聯合の原因は、たとひすべての場合に及ばないとしても少くとも多くの場合においては繼續的ないし暫定的な感情傾向にその根源を有してゐないだらうか。Horwicz, Fouillée, S. Hodgson のごとき人には感情性のもつ潜在的なしかも有効的な影響について注目し、その法則を感情法則（Gefühlsgesetz）と命名してゐるのである。しかし、もし上に掲げたごとき人々が、觀念聯合は感情の聯合を、いたもつと根源的に衝動を前提する、と主張するならば、その主張は誇張にすぎはしまいか、けだし數學者や哲學者の實際に行ふ構想性においてはかかる感情聯合を必然的契機とするやうに思はれないから。けれどももう少し限定して、たとゑ右に述べたごとき排他的なものでなくとも、少くとも最重要な原因として感情性を數へることが出來るであらう。

これは Shadworth Hodgson のいはゆる「興趣の法則」である。すなはち人は過去の出來事に對して凡べ

て同等の興趣を有するものではなく、これらの出來事が意識のなかに再生されるとき凡べての要素が同じやうな仕方で活動するものでなく、もつとも情趣の深いものが他のものを自己の方に引きつけるのである。前節で復全の法則は從來の心理學者の考へてゐるごとき仕方で成立することは疑はしいと述べたが、復全性には實は二つの相反する過程、溶解の方向と再生の方向を區別するとが出來、且つ何らかの興趣を示す對象の部分は全體表象の分解傾向に抵抗するものといつてよく、この意味で興趣の法則は一般的實踐的な聯合法則といつてよい。いふまでもなくリボーの心理學は生命主義を地盤にして立つものであり、生の根柢に根ざすものが存在論的に原本的なものであつて、この意味で感情性は知性の母胎にあたるものといつてよく、また感情性は單なる情緒でなくして、つねに生物體の運動と聯關し、實踐的關心と相卽するものといはなければならない。この意味における感情性にしてはじめて聯合作用の原因たる地位を有するといふことが出來る。

聯想學派の强調せるものが觀念的な復全の法則であるに對して、Coleridge, あるいは嚮に述べた S. Hodgson などが指摘せるものは現實的、實踐的な感情の法則、あるひは興趣の法則であり、興趣とはこの場合「なんらかの仕方で快もしくは不快の形式のもとに我々を觸發するもの」(C. I. p. 36) を意味する。ウィリアム・ジェームズはこれを混合形聯合とよんでゐるが、この法則はいふまでもなく知的な類似ならびに近接聯合ほど正確性を有するものでないにもかかはらず、却つてより根源的なものであり、知的聯合をもし法則と稱するならば、感情法則はむしろ原因といつてもよいであらう。

感情法則はまづ情趣の類似性がはたればなれに在る心像を結合せしめる傾向として現象する。この聯合作用は知的な類似ないし近接聯合と異る。近接聯合は元來自然的聯關性をもたない心像が經驗的に同時存在するところから由來するのであるが、その本領はあくまで經驗の反覆であるに對し、この感情的聯合は心像の媒介項として共通の感情性を措定するものであり、人に應じ時に應じて愛情、憎惡、倦怠、疲勞、喜悅、悲哀などが聯合の中樞として作用するのである。この種の聯合は特に夢や幻想の狀態において、すなはち精神が對象にとらはれずに自由な奔放性を有してゐる狀態において數多く見られる現象であり、意識的、潛在的いづれにしてもこの聯合作用によつて極めて意想外な聯合形態が構成され

て來る。

右の聯合作用は通常一般に見られる現象であるが、これ以外にきはめて例外的な場合として注目せられるのが「色聽」(C. I. p. 38)の現象で、これを説明するためいくつかの生理學的、解剖學的な假説が試みられているが、心理學的にこれを聯合の結果と見たされたいかといふのがリボーの研究態度である。たんらの類似性ももたない色感と音感とが結合するのは、兩者が共通の感情的要素を有してゐるためではなからうか。色感と嗅覺、ないし味覺などが結合する異常聯合もこの種の假説によつて説明されるのでなからうか。而してその確認を十九世紀末榮えた象徴詩人、デカダン派の人々の心理分析を念に置きつゝ考へてゐるやうである。

對比聯合(Association by contrast)はリボーによれば決して原本的なものでなく、知的聯合としての類似聯合が複合體として解明せられたやうに、これも亦上層と下層との重層性として分析せられる。すなはち上層は反復と習慣から生起する近接聯合であるに對し、下層は共通項によつて結ばれる類似聯合であるとされる。しかしここで我々の疑問が生ずるのは、知的聯合においては近接聯合が根源的とされたにかかはらず、何故感情的聯合においては類似聯合が根源的となされてゐるかである。だが同時に注意さるべきは單なる聯合形態の列擧でなくして創造的想像力の分析的契機として重視されてゐるのは實は部分的な類似聯合といはれる類比聯合であるがゆえに、感情的聯合においても亦情趣を共通項とする類似聯合にほかならず、この際ある感情とある表象との結合は必ずしも自然的必然的なものでなくして、經驗的恣意的であることしばしばであり、類似はただ表象が共通の感情性を有してゐるといふにすぎず、そのかぎり廣義な意味の類似聯合とよばれることが出來ない。對比聯合はかかる意味の類似性を基底にもつ複合的聯合態であると見られねばならないであらう。いま一つ注目すべきは大小、左右、高低、貧富のごとき對比性が單なる反復や習慣から後天的に得られるものか、もつと深い先天性をもつものかいなかといふことであり、『創造的想像力』に記されてゐるごとき『相互に對立せる意識的要素』(p. 41)として簡單に説明され得るであらうか。はたして『感情の論理』においては『對比的繼起は感情生活に、おいてきはめて屢〻おこるものであるが、感情的對比はその外觀に反して、いはゆる聯合とはまつたく性質を異にせるものである』(p. 16)といふ言葉が見出され、對

比性の根柢には活動と休息、興奮と沈滯、などに表現される全有機組織の狀態が、すなはち言はば生の法則とも云ふべき對極的な一般的素質が存在し、われわれの欲求、欲望、傾向などすべてこの素質の上に成立するもので、この素質こそ心像の結合を決定する力といい得べく、反對から反對への移行は決して聯合といはるべきものではなくして、實にわれわれの神經系統のエネルギーの結果といはるべきであらう。

對比聯合の上層部を成す近接聯合は、單なる同時性によつて習慣的に結合されたものと考へることが出來ず、却つて根源的には弛緩と緊張との生の律動にもといづけらるべきものであるにしても、それ故になんら知性の干渉なき生活動とのみ目し得るであらうか、ここには識別ないし分化の作用、すなはち同化の作用と相反的な作用を前提しなければならない。分化とは相互に異る二つの狀態を意識に刻みつけることであるが、特になんらかの程度の比較活動を俟つてはじめて、相反者、しかもその根柢になんらかの共通性を有する――これは大ていの場合明白に意識されず、無意識的な基體として作用するものであるが――聯關體を形づくるのである。變極體は單なる排中律によつて割り切れない全體性、二つの相反項が相よつて形成する「場」的構造を有するといはねばならないであらう。

以上述べた事柄は創造的想像力の內包契機となる感情的要素について述べたものであるが、これを要するにそこで取り扱はれたものは心像――知的心像――を創造的に綜合せしめる感情的契機であつた。しかし感情と感情との端的な結合が創造的想像力の構成契機とならないであらうか。『感情の論理』の最後にこの問題が提出されてゐるのは自然の理であるにしても併せて注目を要することと思ふ。しかしこれを論ずる前に感情と知的表象との特殊な聯合樣式を述べて置きたい。すなはち「感情の轉移」の問題であつてこれは二つの場合に區別せられる。一つは類似によつて生ずるもので、ある知的狀態に激刺たる感情が隨伴してゐるときこれと類似的な知的狀態が同一の感情を誘起せんとする傾向であり、他は近接によつて生ずるもので、いくつかの知的狀態が共在してゐるとき原本的狀態に結合してゐる感情が、もしきはめて生動的であるさいには、この感情が他の諸狀態にも轉移して行く傾向をもつことである。たとへば愛人の身體にはじめ結びついてゐた感情が、ついでその人の衣服や道具、家屋などに轉移してゆく現象で、これは個人生活

において社會生活においても屢〻見うけられるものである。しかしこの轉移は決して感情的狀態の聯合でなくして單に系別の初項に結合せる感情の擴張にすぎず、第一義的には知的狀態の聯合と稱すべきものである。(Logique, p. 4-5)

知的狀態、一般に表象を結合せしめるものとしては繰返し述べたごとく類似聯合と近接聯合を擧げることが出來るが、この種の聯合樣式が感情的狀態相互の間の結合にも認められないであらうか。普通われわれが容易に氣付くやうに、類似せる感情的調子を有する感覺はたやすく聯合する。視覺に與へられるものと聽覺に與へられるものとは外界の認識としては全く類似性をもたないのでありながら、われわれは暗い聲とか明るい聲、騷がしい色などと言ひ、また視覺と觸覺とが結合して、冷い色とか、溫い色とか稱し、味覺と結合しては、ほろ苦い叱言とか、刺すやうな批評とかいふ言ひ方をする。觸覺との結合は、たとへば固い、やわらかい、重い、輕い、とかいふ數々の修飾語が列擧せられる。これは認識せられるよりもむしろ感覺せられるものであり、知覺と心像といふ本質的相違にもかかはらず兩者の間に聯合が行はれるのでこれが感情的聯合とよばれてゐるのである、第二に情緒的要素が重せられて、憎しみの苦痛はにがい、薄暗い悲情、煮えくり返るやうな後悔の念、などといふやうに類似性による感情の聯合が一つの集團から他の集團へ擴張するやうな場合が見られ、しかもこの際修飾される名辭は漠然たる感情、情緒であるに對し、修飾する名辭は感覺的印象から派生せるものである。第三にある感情がおなじ種類の他の感情を喚起する場合、すなはち喜悅が慈善を、悲しみが不安や人間嫌ひを、怒りが復讐欲をひき起すがごときものが數へられる。しかしこれらの聯合は眞の聯合と稱し得るであらうか。むしろこれは感情の擴散もしくは變形と解し得ないであらうか。怒りの情と復讐の念との間には兩者を構成する同一の感情があるのではないだらうか。惟ふに聯合といふ言葉は前節にも觸れたごとく余りにも意識的事實を原子論的に解釋する弊があり、二つの意識狀態の共在は意識において相互作用をいとなみ第三の變形態を生ずること知的聯合においても無視すべからざるに、まして感情性にとつてはこれが非常に大きな重要性を有するものであり、したがつて聯合といはんよりは濃淡ないし前途的溶解といふ方がけだし適切であらう。

感情的狀態間の近接による直接的聯合、たとへば子供

が食べてはいけないといはれた果物にとても欲望を唆られるが、嘗て蒙つた罰の恐きを憶ひ出すごとき聯合は、あたかも近接聯合の範疇に入れらるべきかに見える。ただしここでも警戒すべきは、知的な聯合においては、A—B—Cのごとき名辭の連鎖がなされるに對し、感情の場合においてはAS—BS¹—CS²（S、S¹、S²は各〻に隨伴する感情を表す）のごとき定式を示すことであり、しかも興味あることは、この種の聯合作用が通常、反對、對稱、對比のごとき形で行はれ、この型は既に述べたごとく後天的聯合といはんより、生の律動的活動にその根源性を有してゐる。かくして感情的聯合の結合においては類似、結合いづれの聯合樣式も嚴密には認められないとせられ、せいぜい知的狀態と感情的狀態との結合が認められるにすぎない。しかしこのことは感情性に創造的契機が認められないといふ結論を斷定せしめるものでなく、いはゆる觀念聯合式な意識狀態の聯合は却つて復全の法則に制肘されることによつて創造性よりも懷古性過去性になづむといふ恐れが多い。類比聯合は部分的類似として全體性の欠除度の多いものといふより、類似把握の同化作用を契機として未來性を擔ふものと言はなければならない。

ここで我々は『感情の心理學』を回顧してみたい。(Psychologie der Gefühle, übersetzt von Chr. Ufer, Erster Teil, XII. Kapitel, Die Gefühle und die Ideenassoziation) 著作年代から言へばこの書は一八九六年、これに對して『創造的想像力』は一九〇〇年、『感情の論理』は一九〇五年で、その間十年に近い年月をはさみ、且つ『感情の論理』は、『感情の心理』と『創造的想像力』なる既刊の二著作を集大成したものであるとするリボーの言葉 (Logique, Préface) よりしても私が今まで取り扱つて來た問題の解明手續きは決して誤まつてゐないが、思想發展史的に感情の働きが聯合ないし創造的想像力にいかなる關聯をもつかを解明するに一應本書を參考にすることが試みらるべきであらう。

本書においてリボーは聯合に作用する感情性を無意識的と意識的との二つの層に分類し、前者においても、後者においてもその濃淡、深淺の度合に應じていくつかの層を區別してゐる。先づ無意識的なものから述べるならば、第一は祖先から承繼した遺傳的な無意識層で、われわれの意識圏外で、聯合作用に支配的な力を及ぼすやうな或る種の遺傳的な感情形態が存在してゐる。この種の假設にしたがつて Laycock は、民族もしくは個人の底

にひそむ性向を説明せんとし、たとへばハンガリア人が平原を好むのは彼らの祖先の地、蒙古の草原に對する遠い回想が作用してゐるのであるといふ。(A Chapter on some organic Laws of personal and ancestral Memory, 1875) Herbert Spencer もまた、ある風景からよびおこされた印象の中には、そこから直接に得られた感覺のほかに、過去の時代にこれと似た對象から受けた無數の感覺があるといふ。われわれはこの種のいはば Atavism によつて、文明人のなかにひそむ殘虐な嗜好性も説明されるのではあるまいか。要するにこれらの遺傳的要素が個人の心のなかに潜在的傾向として含まれ、これは一生涯觸發されずに睡眠狀態をつづけてゐることもあるが、偶〻それに恰好の狀況が提供せられるとき猛然と奔騰するといふことは十分考へられてよい。

第二の層は、共通感情に由來せる個人的無意識感情で、ある種の氣分、ある種の感じ方が聯合の直接的な原因となる場合であり、それが永續的である場合は性分とか性格とかに相應するものである。卽ち人が興奮的であるか憂鬱的であるかにしたがつて、意識にのぼる觀念において一種の選擇が行はれて來る。また過程的なものは人が健康であるか病氣であるかといふ個人的な狀態いかんによつて夫〻特種な選擇を行つて來ることも周知の通りであらう。

第三の層は、以前の知覺もしくは我々の生活の種々の出來事と結びついた感情狀態の殘滓たる個人的無意識的感情で、これは Lehmann の Verschiebung, J. Sully の Übertragung すなはち「轉移」とよばれるもので、これは同時性 (Gleichzeitigkeit) によるものと類似性 (Ähnlichkeit) によるものとの二つに區分せられる。この區別は既述のごとく『感情の論理』では近接性 (contiguité) による變形と、類似性 (ressemblance) による變形とに相應するものである。(cf. Logique, p. 4)

無意識的感情狀態から意識的なそれへの移行は飛躍的にでなく、段階的に行はれ、したがつてその間種々の混淆形態を有するわけであるが、そのなかでも觀念聯合に關與するものとして三つの部類をあげることができる。第一は現象樣態が偶然的で、移行速度の速い個別的な場合で、すなはち二つもしくは數個の意識的狀態が同一の感情的傾向に服屬してゐるさいそれらがこの傾向を介して聯合せんとするもの、言はば感情の類似性がばらばらの表象を結合するものである。表象相互の結合は表象自體のもつ容觀的類似性によるものでなく、共通の感情調

を介して結合するものであり、これはまさしく創造的想像力の感情的因子として最初に敍述せられたものにほかならない。第二は恒常的固定的な場合で、まさしく人間精神の構成に依據するものであつて、類似せる感情調をそなへた感覺がたやすく聯合する現象である。たとへば視覺に與へられるものと聽覺に與へられるものとの間には、それらが外界から認識が得られるかぎり兩者はたんらの類似性をも有しない。それにもかかはらず我々は暗い聲とか明るい聲とかいふ言ひ方をする。また味覺や特に觸覺がこの種の聯合作用に主要な働きをなすといふ。第三は例外的な場合で、かの色聽といふ生理學、解剖學、心理學などにとつて困難な問題を感情調の媒介によつて解明せんとするものであるが、しかしわれわれはこの假說の妥當性を無條件に受け入れてよいかどうか、とくと研究してみたければならないであらう。ともあれ Flournoy のごときはこの現象を感情的聯合（Gefühls-assoziation）としてとらへ、この聯合は二つの表象の結合が性質の類似性によるのでもなければ、それが意識のなかに規則的なもしくは度重なる共在性をもつて現れたのでもなくしてそれの感情的特性の類似性にもとづいてなされるものであるといふ。（Des phénomènes de synopsie 1893, p. 20）

以上『感情の心理學』のなかで觀念聯合にはたらく感情性の役割を簡單に摘要したが、これによつて聯合作用の動的基礎が明示せられるとともに、創造的想像力の構成契機としての感情的因子は一體そのいづれの部門に重點が置かるべきか再思してみなければならない。くり返し述べたごとく創造性とは心像の新しき結合、組合せであり、同時にそれは主觀内の構成につきず、常に外界に投射せられ、獨立的な表現的事象として構成主觀に對立する客觀性をそなへてはじめて完全性を有するものである以上、結合さるべき表象は必ずなんらかの輪廓性、限定性をもたなければならず、いはゆる幻影的存在の段階にとどまることができない。したがつてこの表象はたとひ感情的要素が支配的であらうとも、その中核には必ず一つの知的表象をそなへてゐることが絶對要件とみなされ、かかる意味での表象相互間に新しき聯合がなされてはじめて創造的と言ひ得るのであるが、聯合、とくに感情的聯合はかの聯想心理學者の考へてゐるごとき原子論的な結合に徹底的に反對するものと言はなければならない。また色調とか感情の轉移のごときものは、たとひ聯合といふ範疇のもとでは重要な意義を有するにしろ、創

造的想像力といふ面よりすればいかほどの價値を有するものか疑問なきを得ない。

もちろん想像の創造性は、藝術的、哲學的、科學的、宗教的などその發展方向の多樣性に伴つて結合さるべき表象の種類は異るにしても、特に音樂、繪畫、詩歌のごときいはゆる美的想像力において重要なる地位を占める感情的表象の聯合はいかなる特色をもつか。類似もしくは近接による感情的聯合は既述の通り本來の意味において否定せられ、すべて生の律動のなかに溶かしこまれたが、生の律動がもし緊張と弛緩の交替による同一律的な反覆にすぎないならば、嚴密な意味において創造は行はれることができない。ここに純粹有機的感情ならざる意味における純粹感情的表象の創造的聯合が論ぜられねばならぬ必然性が存在すると言はねばならぬ。なるほどこの種の聯合は眞の意味において聯合とよばるべきでないかも知れない、もし聯合によつて復全の法則にもとづく聯合を眞のものとするかぎりは。

われわれは最後に、知的表象相互の連結より成り立つ想像力とは質を異にせる、感情的變樣相互の聯合として。の感情的構想力の問題にふれて行かう。これは知的表象を含まぬ感情性自體の聯合であり、かかる種類の聯合が

はたして存在するか否かといふことについては、既に述べたごとく、眞の意味の感情的聯合は存在しないといふ結論が導かれたのであるが、いはゆる聯合法則にしたがふことなく、形式上はたとい類似せる手續きを踏襲しようとも、却つてそれを踏み台として跳躍すべき構想力の次元においては、再び新な觀點のもとに感情的構想力の構造が問はれねばならない。けだし感情的聯合は眞の意味において存在することなく、形式はそれに似て實は生の律動中に根源力を認めらるべきようなものであらうとも、感情的構想力は實に新しき形の形成、組織を必然的契機とするものであり、それは生の律動自體に原動力を仰がうとも、さらにそれを超越する創造性を要求するものと言はなければならない。

答へらるべき問題は、新しい比例にしたがつて、樣々の性質の感情態を集合させ結合させる創造的想像力なる形式は果して存在するであらうか、といふことであり、しかも現實において、たとひ極めて一般的なものでなくとも、いくつかの仕方で表現される感情的構想力が實際に存在するのであり、そのもつとも完全な形が「音樂的創造力」にほかならない。普通音樂は「情緒や情念を音によつて表現する藝術」と定義されてゐる。もちろんこ

の定義は誤りではない。しかしここに又論ぜらるべき問題の焦點がある。一體音樂の主目的は感情狀態の表現にあるのだらうか。音樂の唯一の內容は音であり、あたかも萬花鏡に現れる模樣が千變萬化するごとく、音樂によつて描かれるものは連續的な自主性によつて生氣づけられるアラベスクのごときものである。音樂家の創作は、なんらかの情念を音樂的に描寫せん意圖のなかにあるのでなく、却つて神祕的な力を作用因として心のなかに生ずるごとき旋律や導調であるとなす人々もあり、また他の人々の主張によれば、樂曲はその凡べてでないにしても、ある種のものは聞き手の心のなかに樣々の情緒性をよび起すのは周知の經驗である。シェリングやヘーゲルのごとき哲學者、ショパンをはじめ幾多の音樂家たちは音形式の單なる可塑藝術論に眞向から反擊を俗せかけてゐるのである。相反するこれら二つの音樂本質論は一般論的にその是非を決定するよりも、具體的個別的な實例にもとづいて然るべく判斷さるべきものでなからうか。しかし感情的構想力にとつて興味と問題を提出するのは後者の論說であること言ふまでもなからう。

この種の創作の原因と特色をなす氣分、すなはち感情的精神狀態を理解するために音樂を「從屬的」と「自主的」の二つに分類してみよう。前者はある主題、ある言語に從屬してゐるもの、言ひ換へれば、觀念や心像、單語を感情態に變形するもの、しかもこの變形が音形式の構築を通じて外化されるものであるに對し、後者はいかなる主題、いかなる外面的秩序にもしたがふことなく、感情の經緯があらはに現象してゐるものを意味する。而して抒情劇や交響樂の根基をなすものは、單なる「音」の構築と解せられず、實に「感情性」であるといはるべきもので、これらのなかではあらゆる喜びや悲しみ、怒りや愛情、神に對する情熱や英雄に對する憧れ、これらがすべて一つの秩序、一つの組織をもつて流れて行く。したがつて創作活動はまさしく構築的といふ特性を有しなければならない。もちろん構築材料はいかなるものでもよいかと言へば、そこには言はゆる「音樂型」と稱せらるべき特殊な屬性集團を必要とする、すなはち樂音を知覺、識別し、これを音階の上に正しく排列する鋭い耳の感性、また樂音や音間、その絕對高度に對する確實な記憶、旋律や調和の見事な再生力、音樂形式の理解、新しい音樂形式の創造能力などである。

それではかかる音樂形態における本質的な條件はいかなる點にあるか、第一にそれは「音感界に住まふ先天的

能力」で、たとへばモツアルトにとつては一切のものが自然にメロディとリズムとをもつた形をなし、とくに旅の路では彼の想像力が、眼に映る風景、車の動きによつて燃え上り、何時間もの間移り行くメロディを低吟していたといふ。第二の條件は「内外いづれを問はず一切の事象を音樂的に轉形する先天的傾向」、いひかへればそれらを樂音の形式に裝はれた感情性に變形せんとする素質であり、第三は「對象的狀態に對する感情性の優位」である。感情的構想力においてはたとひ外への表現を必然的契機とするにしても、感覺的形塑的構想力がどこまでも客觀的表象的であるに對し、主觀的感情的といはなければならない。その客觀的な證據としては、眞の音樂家においては通例視覺表象を伴はず、よし隨伴するにしても本質的でなくして偶有的であり、これに反して形塑藝術においては視覺表象がきはめて明瞭である。

いはば空間的表象とも稱せらるべき視覺表象によつて構成せられる構想力においては大體一つの發明はこれに先立つ種々の發明を踏み段として成立する謂はゆる「成層性」をその特色とするものであるが、時間的表象たる感情的意識態はその外的表現性（けだし構想力は表現性、外向性をその本質としなければならぬ）においてこれと稍趣を異にする特殊な技術を必要とする。この發展は樂器の發達史を調べることによつて客觀的研究材料を得ることができるが、ここでは音樂がその原始性において舞踊と歌謠とに密接な聯關をもつており、舞踊が身體の運動を媒介として感情を表現するに對し、音樂は音聲を媒介として感情を表出するものであることを指摘するにとどめよう。(cf. L'imagination créatrice affective, Logique, pp. 127–182)

これを要するに感情的な創造的想像力は音樂においてそのもつとも典型的な理想形を見出すことができ、音樂の研究は、したがつて、この種構想力の本質を洞察せしめるものであるが、不幸にして從來かかる心理學的研究態度をもつて音樂の本質およびその發達史を檢討せるもの少く、感情的構想力の構造はいまだ十分な解明を見てをらない。もちろんその欠陥の一原因としては感情的表象のもつ流動的屬性を擧げねばならないであらうが。

六

無意識的要素のもとに理解される第一のものは無感である。この言葉は通常宗教および藝術の世界において使用せられてゐるやうであるが、靈感は未知なるものからの告示として個人意識を超越するものとみなされ、その

點において無意識的なものと認められてゐる。しかし歴史的な發展を追ふて考へてみるとき靈感もいくつかの型式を有してゐる。第一にこれは文字通り神々に歸せられ、希臘では有名なデルフォイの神託に見られるやうにアポロン神やミューズの神々に歸屬せしめられてゐる。次いで靈感の賦與者は超自然的な精靈や天使、聖徒などに轉移せられてゐるが、要するにそれらはすべて人間に對して外的ないし超越といふ性格をもつてゐる。さらに降るとこれらの超越存在はその内容が空虛になり、遂には古代の有名な詩人が詩作の幇助者になつたり、また狂熱とか詩狂、靈移、内にあるダイモンなどと比喩的に言はれる一種の神祕的存在に化するが、一層科學的な見解よりすれば、靈感とは特殊な半ば意識的半ば無意識的な狀態として特徴づけられる。前二者が尙ミュトスの段階にとどまるとすれば、第三者はまさしく科學的心理學の研究對象でなければならぬとするのがリボーの採らんとする態度であらう。

無意識の現象は現在いくたの研究業績も數へられ、その實在性に對しては心理學上なんらの疑問を挾む必要はないであらうが、意識を意識自體より解せずに、却つてその基體となる無意識性より解釋せんとしたリボーの態度は十九世紀いまだ斯學の十分發達せざる歴史的制約の下において重要なる見解であつたと稱すべきで、意識を從來のごとく靈魂ないし精神の基本屬性とせずに「大腦活動に附加せられる單純現象」と解し（The Disease of Personality, P. 4）かかる假設を採用することによつて從來論議の種となつた意識の構造をめぐるあらゆる難問から脱去し得ると述べてゐる。

大腦活動と意識現象發現の生理學的な解明は彼の告白するやうに將來の課題として殘されようとも、われわれが心理學の立場から、とくに創造的想像力に關係する點から見逃すことの出來ないのは無意識性のもつ積極的な活動性であつて、事實に卽して觀察するときそれを二つの部門に區分し得るやうに思はれる。一は靜的無意識態で他は動的無意識態である。前者は習慣、記憶、その他概括的に組織化された知識で、その特色は靜止、保存の狀態であるに對し、後者は潛在的な活動の狀態で、數學や工學の難問が漠然とした昏迷狀態を何時間か何日か經過した後、忽然として解決されるごとき例はいくたの學者によつて周知の事實に屬し、ここでは無意識態がいはば孵化の溫床として役立つてゐるのである。かくして「思索のもつとも深い人はもつとも鮮明で且つ意識的な

觀念をもつてゐる人でなく、却つて無意識的な勞作の豐饒な貯へを隨意に使ひ得る人である』(Cr. Imag. p. 339) といふやうな一見逆說的な言ひ廻しが可能なのである。

二十世紀初頭ブラッセル大學のGeorges Dwelshauvers は「無意識態」(L'inconscient) なる著書のなかで、無意識性のもつ重要性を歷史的に回顧し、同時に幾多の研究家によつて開かれたこの意識下現象の活動樣式を手際よく分類してゐるが、これによれば

(1) 請神生理學的な無意識態。ヘルムホルツ、デルブウフの研究せる色彩對照の原因、視錯覺（フェレ）などに見られるやうに知覺意識によつてはなんら注目されずに感性知覺の構造內に進入して來るものすべてを意味する。

(2) 自動的無意識態。これはピエール・ジャネが下意識もしくは心理學的自動態と名づけたもので、特に習慣の中にその典型的なものが認知せられる。

(3) 共在意識。自我分裂、二重人格などに見られるやうに心的作用が常態自我から分離して、あたかも第二自我が構成されるかのごとき狀態に組織されるもの。

(4) 能動的潛在的無意識態。これは(a)觀念、回想、衝動などが突然意識に昇つて來て、しかもその起源が判明しないもの (b)發明的想像力 (c)感應その他これに類似せる現象にみられる無意識態 の三種に區分せられる。

(5) 記憶の無意識態。(a)ベルグソンが强調せるごとく現在の感覺ないし觀念に現れる記憶の壓力 (b)傾向のなかに認められるもの (c)觀念聯合のなかに現れるもの。

(6) 感情的無意識態。

(7) 遺傳的無意識態。

(8) 理性的無意識態。

の八つに分類される。(Op. Cit., pp. 15-16)

この分類表においてリボーのとり上げた無意識活動は第四類の(b)に相當するものであり、且つここで問題になつて來るのは衝に觸れた靈感の構造でなければならない。靈感はその積極面として突然性と非人格性との二つを擧げることが出來る。靈感は突如として意識のなかに湧出するものであるが、しかし又潛在的で、屢〻長期にわたる勞作を前提とするもので、その現象形態は他の周知の精神狀態、たとへば忘却の淵に沈んでゐながら長い孵化期間を經て後突然行爲に現れて來る激情とか、また際限なき思索によつても到底目鼻もつかなかつた難問が一擧にして解決されるごときものと類似的で、そこでは

努力感とか準備活動があたかも缺除してゐるごとき様相を呈してゐる。同時に靈感においては意識的個體を超越し、たとへ彼を通じて働いてゐるのであるにしても全然彼にとつて未知な力が啓示されて來る。もちろん靈感をダイモン的な神祕現象としてでなく、前述せる動的潜在活動として解するとき、それは明に無意識的發明力として言ひ換へらるべきものであり、それゆえ宗教、藝術活動に限らず科學、哲學の思索においても同じ構造を示すものでなければならない。Paul Landormy のごときは一六一九年ダニューブ河畔タウブールの旅部屋で冬の一夜忽然自己の方法を悟つたデカルトの瞑想に著しい啓示感を與へてゐるし、ポアンカレは "L'invention mathématique" のなかで數學の難問を解決した自己の體驗を列擧してゐる。かくして靈感は動的潜在活動としてあらゆる精神領域にわたつてゐると言はねばならない。

Dwelshauvers はこの潜在活動の構造を次のごとき假說によつて解明せんとしてゐる。卽ち意識的作業が先づ若干數の十分限定せられた要素を動員し、他の要素を排除して置く。さうしてこれらの動員された諸要素が無意識態の狀態に移行し、そこで潜在的に活動し、一つの「始發點」(points de départs)を形成する。意識的勞作はこの始發點の檢證であり發展であるといふ。(Op. Cit. p. 161) リボーも大體これに準じた見解を示し、意識は多數の且つ強烈な心像によつて獨占されることにより外界の影響から遮斷され、たとへそれを導入されやうともそれは唯主觀的な夢の網のなかに包みこんでしまはれる。かくして內的生命が外的生命を否定するごとき狀態となり、常態の生活現象と全く正反對の樣相を呈するにいたる。しかも無意識活動が正面に押し出て、非人格的な特性を保持しながら主役を演じてゐる。假說的に言へばこの活動はあたかも意識活動と同一手續において働いてゐるがそれが唯自覺的自我との繫りをもたないだけであるとも解せられる。併しリボーも明言してゐるごとくこれは純然たる假說の範圍を出でないものであり、無意識態と意識態とは如何なる境界によつて隔てられてゐるのか、その點生理學的にもちろん明確な學說が提出されてゐないが、心理現象としてなんらかの意味における靈感が存在するとすれば、それは先に「突然性」として特色づけたごとく何らかの斷絕性が存しなければならない。實例に徵しても靈感の內容は極めて斷片的暗示的であり、したがつてリボーが適切に述べるやうに靈感は

『無意識活動が意識過程に傳達して、後者が飜譯する暗號電報にも似てゐる。』(Cr. Jung. p. 57) あるひは意識と無意識をつなぐ契機、危機、指標であるといつてもよからう。

創造的想像力は新しき心像の結合であるかぎり、靈感によつて表現される潛在的動的活動はたとひ暗號ないし指標として、要するに象徴として把握されやうとも、この象徴が意識的過程の始發點となる點において何らかの眞實性を含まねばならない。しからば現實化さるべき象徴的顯現はいかなる形で現れるか。リボーはこれに二つの過程を區別してゐる。一つは媒介的聯合であり、他は星座現象である。媒介的聯合に着目した最初の人はハミルトンであるが、リボーもこの種の聯合形態を認め、且つこれが新しき組み合はせの有力な方法であるとする。卽ち意識下にあるbおよびcなる媒介項を介してAとDとの結合が可能になるものであるが、ここでも注目しなければならないのはAとb、cとDとの結合が類似もしくは類比聯合、すなはち分離作用と近接聯合との協同作業が單に意識と無意識との兩界にまたがつて行はれたものにすぎないか、もしくはその結合樣式が別種の聯合法則にしたがふものであるか、今後の研究に負ふところ大であらう。

無意識的聯合形態としてより多く重視さるべきものはZiehenによつて命名された星座現象(Constellation)で、これは一つの心像ないし心像群が原因となつて他の多くの支配的な傾向を誘起せしめるものである。なるほど聯合の立場から言へば一つの心像ないし觀念が種々の類似ならびに近接聯合によつて數多の心像群を連結せしめるのだとも言へようが、たとへば最も典型的な想像力の開花舞臺たる神話の實例に徴してみて、同質的一律的な原始社會の社會現象ならびに自然現象を素材にして實に多樣にして華麗な神話が織り成されてゐる現象は、單なる知的聯合形態によつては理解し難い要因を含むものといはなければならない。圖式的には何故Aが、それを中核としてそれぞれ放射狀的な連結理由をもつBCDEF…のなかで、あるときはBを、他の時にはFを喚起する力をもつてゐるのであるか。これはもはや靜的な結合樣式でなくして動的なそれでなければならない。BもFも同じやうな緊張力をもつて潛在態から現勢態に移らうとする際、Cなる力學的要素がFに向つて禁止的影響を與へるとき、FでなくしてBがAと連結するといへよう。しかもAとBとの聯合は知的要素のもとに客觀的に

比較されるとき極めて類似した成素をもつてゐるがゆえに當然類似聯合によつて聯合さるべきであるにかかはらず、聯合せず、突如としてある瞬間その聯合が遂行せられるのは生の深い根柢に根差す無意識的聯合に根據をもとめねばならない。星座現象は根柢的に生理學的であり、生命的である。あたかも磁石の移動が多くの鐵片を自在な磁場に形成し、また熱烈な一信徒を極軸として感應的教團が形づくられるごとく、星座現象は一つの心像を中核として無意識的に一つの聯合群團が形成されるものと言つてよいだらう。

結論として無意識的要素は本質的に知的要素および感情的要素と相違するものか、あるひはこれらの特殊形態として理解さるべきか、無意識態自體の解說如何によつて問題の解決は左右されるであらうが、最後にドゥエルショウベールのきはめて示唆的な解釋を附け加へ、それの眞僞を將來の私の課題としてみたい。『無意識的に仕上げられる證明は、われわれの美的感情ともつとも親緣性をもつ證明であり、ここで決定的なものは、したがつて、感情生活である。ただ、われわれを感動せしめる諸結合のみが意識に負課せられ、注意を固定せしめる。』(Op. cit. p. 162)

七

以上われわれは創造的想像力の構成契機として知的、感情的、無意識的、三要素を取り上げ、各々の項目についてその具體的內容を明にして來た。問題はこれらの三契機がいかなる聯關性を形づくり、いかなる綜合的統一態を形成するかといふことである。いふまでもなくこれらの諸契機はそれぞれ孤立的に存在するものでなく、聯關性を有してゐるものではあるが、構想力の特色は「形」の形成にあり、「表現」として客觀的な獨立性が要求される。もつとも主觀的な感情的構想力といへどもこの疎外性を有する點においてまさしく軌を一にするものである。しかし「形」はあたかも万花鏡の破片が偶然的な形成からカオス的な美を生みだすごとくに「形」を生產するものであつてはならず、そこには常に積極的な主體の意志、行動が、素材を取捨選擇して新しい形を創造する表現活動が隨伴してゐることを必要とする。すなはち「形」を貫くものとして一つの中樞、あるひは導調が要請されてくる。この紐帶は決して分析によつて見出された三契機の自然的な綜合から後天的に發見されるものではなく、却つて先天的にこれらの契機のもとにおいてその表象を結合、形成せしめる指導原理にほかならず、し

たがつてこの原理そのものの指向性にもとづいて一切の構造が限定される體のものである。

この原理はしかるに時間的、空間的の兩方向において、あるひは運動的と靜止的との兩平面において成立するものと解される。前者は「理想」であり、後者は「固定觀念」ないし「固定感情」である。『理想は歴史的發展における動的統合原理である』(C. I. p. 81)『客觀化をもとめる主觀的原理は理想である』(ibid. p. 80)といふ言葉はまさにその原理の動性を意味するであらう。これに對して、固定觀念ないし固定感情は、自己を表現化するために一つの目標を設立し、これを具現するためにそれに適應せる手段を發見せしめる動力となるものである。もちろんすべての觀念ないし感情はそのもつとも原始的なものにおいても自己疎外の運動性をふくむものであるが、特にそれが創造的であるためには生の直接的表現を乘り越え、自己以外の客觀的素材を媒介として自己を實現する媒介性をもたなければならぬ。この素材の選擇それの組織化においてその方向を決定するものがここにいはゆる固定的な觀念ないし感情であるが、「ないし」と言はれる理由は、兩者が實は決して隔離的な別個存在でなく、根柢において緊密な結合をしめしつつもその支配的要素においてしか名付けられるにすぎないといはれる。觀念はヒュームも指摘せるごとく、心理學的に表象と絶對的に異質的なものでなくして、つねにそれから出發し、それに根源を置くものであり、表象はその知的なものにおいて、表面卽物的對象的なものでありながら、生の立場からは行動の「場」の認識といふ意味において運動的であるといふことができ、その情的なものにおいても同樣に一見主觀的任意的でありながら、ホールデンの指摘する意味において內部環境の告知としてまた動的要素をふくむものといはなければならぬ。生は流動であるといふことは無差別的な意識流のごとき意味においてしかるのではなく、常に生を生たらしめ、同時にそれを破滅にもみちびく可能性をふくむものとしての環境との離接性において流動的であるがゆえに、生はつねにきびしき自己反省と自己發展を通じてのみ生を維持し得るもの、生は內に必ず行動をふくみ、行動は發展を通じて生自身を保存せんとする要求をもつものである。

固定觀念ないし固定感情は綜合原理であるが、それだけでは先にその性格を規定したごとく空間的靜止的であり、したがつて動的發展性を欠除し、理想はもし一般に信ぜられてゐるがごとく普遍性を必然的屬性とするなら

ば、創造性における個別性、特殊性を喪失するといはねばならない。タイラーが強調せる原始宗教のアニミズムはまさに創造的想像力の完全なる表現と見たされ得るが、神話はその千變萬化の多様さにもかかはらず、その根底に一つの類型性をもつ所以は、かかる「形」の構成原理が同一であることを意味し、太陽神話のごときその表現的素材において絢爛眼を奪ふものがあつても大體おなじ典型を有してゐる。これらの神話の形成過程が、のみの一打が一打を生むごとき辨證法的創作過程といふより、既成の鑄型にとかしこまれた素材のカオス性にその美が見出されるといつた方が正しいであらう。

しかし理想は語源的に理念と同一であり、後者が觀念と同一種的抽象性をもつに對し、前者は行動の究極目標として行動を導くといふ點で、また行動の動力因となる。目的因といはれる所以である。綜合原理としてリボーの意味せる理想はかならずしも哲學者の意味するやうな内容をもつとは思はれないが、理念が一面現實態を越える抽象性と普遍性とをもつとすれば、かかる超越性をもてるもののみがよく雜多を溶入せしめる鑄型の役目をはたすであらう。しかし神話の世界は尙思惟たいし想像の類型性が、したがつて個性の獨自性が分化してゐないものであるに對して、個人の獨創性によつて形成せられる構想力はこの理想を同じく個別化せるものとして有しなければならない。リボーおよび彼らの一派が強調する「興趣」はこの意味において「個別化せられた理想」といふ定義が與へられはしまいか。そうして興趣がかく解せられてはじめて生の活動、その中心をなす感情（Affection）の動きが何を樞軸として發展するかが理解せられるやうに思はれる。

リボーにとつて根源的なものは知性でなくして感性であり、理性でなくして感情であつた。「感情の論理」はかかる理性的論理の根柢としての論理の構造を解明せんとしたものであり、前者のロゴスに對して後者のアナロゴスを重視するものである。十九世紀における論理主義と心理主義の爭ひは一應前者の勝利に終つたかの觀を呈してゐるが、前世紀末から現世紀にかけての生命哲學、實驗心理學の目ざましい進歩、社會學、民俗學の發達、とくに原始社會、原始宗教の科學的研究は、ふたたび論理主義への反省を促してゐるものと見て差し支へなからう。もとより心理主義の立場では把握しがたい論理の妥當性を認めるに吝ではないが、自己の純粹性を主張すること急な余り、その發生地盤、發生過程を無視するの態

度をとるならば、却つて空虛な形式性と固定性とに陷る危險がありはすまいか。同一律およびその裏面としての矛盾律が發見せられたことは人間悟性の進步にとつて劃期的な出來事に違ひなかつた。理性の自律なくして學一般の成立はない。しかし理性の獨立は非理性的なものの蔑視を必然的に要請するものでなく、自己の獨立による他者の再認を、他者との聯關性の認識をふくむものでなければならない。發展的にみてロゴスはアナロゴスの地盤を離れて成立するものではない。感情の論理もしくは構想力の論理には、理性論理で使用されるごとき論理の純粹性は存在しない。しかしなんらの論理性を有せざる構想力の活動はない。生は無論理的であると貶せられるが、生がもし主體の活動を介して創造的に發展するものと解せられるならば、生の根柢にはなんらかの Cause をふくまねばならない。(cause は原因であるとともに目的であり、この意味においてのみ自律的、自己發展的である。『感情の論理全體を支配する原理は目的性の原理である』(Logique, p. 49) とリボーも明言してゐる。構想力の論理は啓蒙哲學者カントにあつても合目的性をその原理とするものであつたことはこの點でも重要な意味を擔ふものではあるまいか。

構想力はその知的契機においてアナロギアを主要契機とするものであつた。しばしば繰り返せるごとく、創造的想像力は表象の新しき結合、新しき聯合の活動であり、したがつていはゆる觀念聯合となんらかの意味で相關的でなければならなかつた。しかし聯合が復全の法則に立脚する以上、たとひ外見上創造的未來的であつても、原理的には復原的過去的であり、眞の創造性に與るためにはアナロギアを介して聯合を遂行せざるを得ず、同時に聯合は流動的表象系列に對する截斷抽象活動を必然的に要求するものであつた。聯合に對する分離の重要性を指摘せるリボーの卓見まことに聞くべきものがあらう。ともあれこの種の類比聯合は感情的契機においても同樣にとり上げられ、感情の非通性を媒介とする新しき聯合形態が論じられてゐる。しかも創造的想像力は原本的に主觀的であるがゆえに、この感情的契機が中心を占めるものたること多言を要すまでもないが、感情は根源的であるがゆえ同時にそれが意識の表面に現れること少く、あたかも海面に一部を凸出せしめる大氷山のごとく意識の底には限りなき無意識的地平が開かれてゐる。第三の契機として無意識的要素が論じられたことまた當然である。しかしすべての無意識的なものが同一のエネル

ギーをもつて想像力のいとなみに參加するのではなく、そこには一が他に先んずる支配的勢力をもつてをる。この支配性を決定するものが欲求であり「傾向」であつて、この傾向に乘つてすべり出る一つの中心的表象に、鐵片が磁石に吸びよせられるごとく附着する現象がいはゆる「星座現象」とよばれるものである。かくして知的、感情的、無意識的三契機の聯關は表層より深層へ、周邊より中心への移行をしめしつつ緊密な聯繫をたもつものといひ得るであらう。

リボーにとつて根源的なものは運動を內にふくむ「傾向」であり、欲求であつた。それは生の衝動であるとも、élan vital であるともいへよう。リボーの意味せる la vie affective とは『本能、傾向、欲望、嫌惡、また恐怖、憤怒などのやうな émotions と名づけられるもつとも複雜な狀態、それから émotions の安定してしかも强度のつよい Passions』(Logique, p. 21) などを包含するものであり、それはまた激情として、意志として、表象結合力として種々な働きを示すといふ。要するに生は運動として把握されることにより、いはゆる感情も、知性さへも運動的に解明されて來る。感情に關する理論はヘルバルトおよびその亞流に代表されるごとき悟性的理論と、ベイン、スペンサー、モーヅレイ、ジェームズ、ランゲなどに代表される生理學的理論に大別されるが、後者はあらゆる感情狀態を生物學的な關聯に還元し、それを植物的生命の直接的根源的な生命とみなすものであり、『感情はもはや表面的な現象、たんなる調落でなくして、欲求や本能、すなはち運動のなかに根ざすものである。』(Psychologie der Gefühle, S. 3) 『思惟や感情、激情はふかい要素——運動的、すなはち衝擊的ないし禁止的——を包含するものであり、……この運動的要素は現今の言葉で、またしばしば生理學的な論文でいはゆる「創造的本能」とか「發明的本能」とかよばれるものである。』(C. I. p. 42) ただ構想力を論ずるにあたつてわれわれの誤解を招かないために一言すべきは、それの根源的な勢力が上述せるやうに感情性にあるひは傾向性に、すなはち生の暗き衝動にもとめられようとも、それだけで美しい想像の花は咲かず、この衝動性に推進力を供給されつつ、さらに知的なあるひは情緒的な種々の構想作用を展開する天才的才能が不可缺なものとして要求される、といふことである。

想像力は右のごとき分析的要素と綜合的原理をもつて成立するものではあるが、それが現實に具體化されるた

めには夢や幻想に類せる主觀的なものでなくして、たんらかの客觀性、共同性をもつものでなくしてはならない。客觀性をもつといふことは、それが單に音聲もしくは言語を介して直接的な自己表現をするのでなく、言語や符號、行爲や道具、その他の現實的事物を介して自己を表現すると同時に、その表現が共同性と現實性とをもち、逆に表現主體の意識を限定するといふ無限圓環を要求するものである。もちろん想像の所産が、技術的理性、思辨的理性の所産と抵觸して、その現實的權威を喪失することもあらう。しかしかかる喪失は構想力の不當なる擴充を制限するにとどまり、自己の存在理由全體が否定さるべきものでは毛頭ない。

さもあれ人間精神の發達段階において構想力の具體的な表現はまづ原始人および幼兒の心意にみられるアニミズムと遊戯の形態であり、ついで浪漫的な架空譚である。原始宗教の理解、神話の解釋は今日非常な發展と分化をみてゐるやうであるが、タイラーにみられるごときアニミズム的解釋は想像力の解明を通じて一部の人が非難するごとき幼稚な解釋として斥けられない點が理解せられようし、遊戯の本質を餘剩勢力の消費といふやうな生理學的な說明をもつて滿足せしめることはできないであらう。（遊戯の解釋については Groos および Stern を參照せられたい）

これを要するに創造的想像力はその創造性を生の本質たる運動性に有するものであり、分離と聯合を通じて行ふ心像の新しき組み合せであつたが、同時にそれは受動的想像力との相關性、連續性を有してのみ自己の活動をいとなみ得るものであり、後者は記憶、すなはち心像の自發的な再生を前提するものとすれば、創造的想像力もまたこの自發的な心像の再生をその構成原理としなければならない。悟性や理性に對する過度の信賴、感性や感情に對する不當な壓迫から、また研究方法の無自覺性と研究材料への盲目性とによつて從來ほとんど無視に近い狀態に放置されてゐた想像力、とくに創造的想像力の領域に敢然と開拓の鍬を入れたリボーの勞作に敬意を表し、且つそれによつて多くの視野を獲得できた彼の著作を紹介且つ組織づけ得たことを心から喜ぶものである。

（完）